

人間の主体性について：我的あり方と無我的あり方

その他（別言語等） のタイトル	On the Subjectivity : our "self" and our "selfless-Self"
著者	狐野 利久
雑誌名	室蘭工業大学研究報告
巻	5
号	1
ページ	395-405
発行年	1965-07-08
URL	http://hdl.handle.net/10258/3250

人間の主体性について

—— 我的あり方と無我的あり方 ——

狐野利久

On the Subjectivity

— our “self” and our “selfless-Self” —

Rikyu Kono

Abstract

1

Nietzsche says, “God is dead. It is you and I who have killed Him”. So long as we remain in the self-consciousness, we are surely to kill Him by the sword of our intelligence (vikalpajñāna), which has invented all kinds of instruments to elevate the standard of living and has developed more sciences and mechanical civilization.

2

The self-consciousness has the subject-object structure, from which our intelligence is generally derived. So the self-consciousness regards my-self (ego) as the absolute One.

3

Our intelligence is analytic and discriminative. So the intelligence is for us as if it were the measure of all things. The prajñā is, on the contrary, the non-analytic-analysis and the non-discriminative-discrimination. The former discriminates all things have self-nature (svabhāva); the latter does not, because all things are under the truth of Pratītyasamutpāda (mutual dependence). Nāgārjuna, Buddhist philosopher of India, therefore, says that everything is of the non-identity-and-non-differentiation (anekārtha-anānārtha) in his Mūlamadhyamakaśāstra. When we look upon all things through our prajñā, they are as follows:

good = bad and, yet, good ≠ bad

1 = 2 and, yet, 1 ≠ 2

or

man = God and, yet, man ≠ God

Our discriminative intelligence explains that “good” is “good” and “bad” is “bad”; “good” can never be “bad” or vice versa.

4

One who regards our intelligence as the absolute relies on the self-centred-mind; he says, “I depend on my-self, not God”. But, the man who is led by our prajñā relies on the selfless-Self; he says, “With a man who is master of himself wherever he may be found he behaves truly to himself (随处作主立所皆真)”. These two types express strongly the subjectivity as the human beings. But, from my point of view, the self-centred-mind-man will fall into the “Selbstentfremdung”, because

the intelligence induces him to think that science is everything. The selfless-Self-man, on the contrary, will realize himself as the truly independent man (Buddha), because he is himself and yet not himself.

5

Nietzsche insists that the “Wille zur Macht”, instead of God, should be regarded as the highest value. But, from my point of view, he does not deny our-self (ego) at all. As for me, selfless-Self should be established as the highest value through our prajñā. Then, we may find ourselves the truly independent man.

I

Nietzsche が有名な『神は死せり (Gott ist tot)』という言葉をはじめて使ったのは、1882年に書いた『悦ばしき知識 (Die fröhliche Wissenschaft)』の第3巻においてであった。すなわち、その巻の125番の文章の中で、物狂いの人 (Der tolle Mensch) が、「おれたちが神を殺したのだ——お前たちとおれがだ！ おれたちはみな神の殺害者なのだ！ (Wir haben ihn getötet—ihr und ich! Wir alle sind seine Mörder!)¹⁾」と神を信じない人達の前で叫んでいるのが、それである。そうして、この物狂いの人は、神という「世界がいままで所有していた、最も聖なもの、最も強力なもの (Das Heiligste und Mächtigste, was die Welt bisher besaß, ……)」が死んでしまったがために生じた、心の不安と孤独とを次のようにのべている。

この地球を太陽から切り離すようなことを何かおれたちはやったのか？ 地球は今どちらへ動いているのだ？ おれたちはどちらへ動いているのだ？ あらゆる太陽から離れ去ってゆくのか？ おれたちは絶えず突き進んでいるのではないか？ それとも後方へなのか、側方へなのか、前方へなのか、四方八方へなのか？ 上方と下方がまだあるのか？ おれたちは、無限の虚無の中を彷徨するようにさ迷ってゆくのではないか？ 寂莫とした虚空間がおれたちに息を吹きつけてくるのではないか？ いよいよ冷たくなっていくのではないか？ たえず夜が、ますます深い夜がやってくるのではないか？ 白昼に提灯をつけなければならないのではないか？ ……²⁾

この言葉には、自己の支えを失ない、目標とすべきものを何も持っていない³⁾ 現代の人間の心の状態を、如実にあらわしているように思える。このような自己疎外、或いは人間疎外という状態は、不安、憂うつ、気の喪失、無気力、人間の機械化といった一連の問題を引きおこし、心ある人⁴⁾をして、人間の精神的危機 (spiritual crisis) を叫ばせているのである。

そこで、このような現代の精神的危機は、どうしておこったのであろうか、その病根は一体、何によるのであろうかということを、考えてみなければならぬ。Erich Fromm は、

Since Descartes, man has increasingly split thought from affect; thought alone is considered rational—affect, by its very nature, irrational; the person, I, has been

spilt off into an intellect, which constitutes my self, and which is to control me as it is to control nature⁸⁾.

といっているが、私は原則的に、彼の意見に賛成するものである。なぜならば、現代の精神的危機は、合理性の追求の結果、あまりにも知性に偏重し、あたかも知性をして、万物の尺度たらしめたことによるからである。元来人間の知性 (intellect) というものは、物事を客観的に、分析的に、取扱って行くものである。その場合、客観的に分析的に取扱って行くものは、外ならぬ私 (客体に対する主体としての私) であるから、知性の働くところには常に知性を所有する主体としての私と、知性の働く対象である客体とが、二元的 (dualistic) に対立的に生じているのである。すなわち、善と悪、正と不正、生と死、神と人等々の如くである。しかも、Hegel の弁証法からすれば、物ごとはずべて、These→Antithese→Synthese という process で発展してゆくということであるから、対立のあるところに進歩ありということになり、それだからこそ、人間の知性は、過去において想像もつかなかったほどの高度な機械文明を、つくりあげたのだということになる。ところが、知性の生み出した機械というものは、大変能率的で便利ではあるが、非人間的 (impersonal) で創造的でなく、又制約的で無責任なものである。それ故機械をつくり出し、機械を使かう立場にある人間の方で、各自が人間としての主体性 (Subjectivity) というものを、はっきりと確立しなければ、人間はやすやすと機械化 (mechanization) されてしまい、機械の奴隷となり、かくして人間であることを自ら放棄しなければならない。そうして、人間はもはや創造的でなくなり、思索を廃し、反射的衝動的に行動することとなる。このように、人間の心が機械化されてしまうと、Erich Fromm もいう如く⁹⁾、合理性を追求する合理主義が、まさしく非合理性に転落してしまうのである。

かくいう私は、何も歴史の歯車を逆に回転させて、機械文明を原始時代の素朴な手工業の時代まで返せせというのではない。人間は、あまりにも科学的と称して、知性に重きをおきすぎたために、人間の生命がますます軽んぜられ、犠牲にされることを憂うるのである。それ故に、このような機械文明の中にあつて、人間としての主体性を失わずにますます積極的に生きてゆくことを考えねばならぬと思うのである。

2

Descartes はあらゆるものを疑った結果、私がここにあるということだけは、疑えない事実であるとし、有名な cogito ergo sum ということをいった。彼の著書である「省察 (Meditationes)」をみると、私が見るすべてのものは偽であると仮定しても、

私は有る、私は存在するといふ命題は、私がこれを言表するたび毎に、あるひはこれを精神によって把握するたび毎に必然的に真である、として立てられねばならぬ¹⁾。

といい、しからば、私が有る、私は存在するという時の「私」とは、一体何であるのかという疑問に対しては、「私」とは、

思惟するものである。これは何をいふのか。言ふまでもなく疑ひ、理解し、肯定し、否定し、欲し、欲せぬ、なほまた想像し、感覚するものである²⁾。

といっている。このような Descartes の立場に対して、Pascal 等が批判しているようであるが私は、Descartes の立場を「我的あり方」とであると判じるものである。なぜなら、Descartes は自らを主張する、いわば、自我意識 (ego-consciousness) に立っているからである。自我意識に立つということは、そこには「我あり」という「我 (the "I")」、すなわち、「自我 (the ego)」があらわれているということであり、自我が肯定されているということである。自我それ自身の肯定は、必然的に自我自身の二分化をとともなうものである。すなわち、「我」の所有者である私がすべての中心であり、私以外のすべてのものは、「我」によって肯定された客体であるということになるのである。前にのべた人間の知性というものも、或いは又、人間のもつ理性というものも、私なる「我」から働き出るものであるから、分別的に、実体的にとらえる「我」そのものというようにいってもよいかも知れない。

イギリスの詩人 William Blake (1757-1827) の作品の中に、予言書 Prophetic Books と称せられる幾つかの詩があるが、それらの詩の中に、Urizen と名づけられる神が、出てきている。Urizen は知性の神で、はじめの中は Prince of Light と呼ばれていたのであるが、その中に感情の神の Luvah に対抗するために、あらゆる生命の圧迫者となり、遂には Urthona (Spirit) に属している王位を篡脱して、自ら王となるのである。

Obey my voice, young Demon ; I am God from Eternity to Eternity.
Art thou a visionary of Jesus, the soft delusion of Eternity ?
Lo I am God, the terrible destroyer, & not the Saviour³⁾.

このようにのべる Urizen は、感情を非合理であるとして排し、知性のみを合理的なものであるとする吾々の「我」のあらわれに外ならないのである。それ故 Blake は、吾々の「我」が God にとってかわって絶対者となり、吾々の心が知性の支配を受けてしまう時、人間の不幸がやってくることを明言したのであった。

3

このような「我的あり方」、自我中心的あり方というものは、知的であり、分析的であり、対立的であって、物事を実体的にとらえてゆくから、結局は如実に物を見るということは出来ないのである。例えば、ここに一輪の花があるとする。「我的あり方」からすれば、その花は見られるものであるから、客体であり、見るものから見られるものへと知性が働いて、植物学

的に、物理学的に、或いは化学的に、色々分析され研究される。その際、吾々の知性にうったえるものは何でもとらえて、それを対象から抽出する。そうして、一切の抽出が終ると、そこから結論というものが出て、科学的研究成果というものが出来上り、かくして吾々は、その花について科学的に色々なことがわかったということになるわけである。だが、果してそれだけでその花をわかった、如実に知り得たとすることが出来るだろうか。否である。知的分析的に見るだけでは十分とはいえないからである。そのような科学的方法は、ただ物の一面を見るだけであって、更にその上において必要とされることは、その花と一つになるということがなければならないのである。花と一つになるということは、自我中心的なあり方を否定し、花の中に私自身を埋没することによって、一輪の花となり、花となりきることである。つまり見る私が、見られる花そのものになりきって、その花と一つになって感じてゆくという面がなければ、如何に科学的にその花を知り得たといっても、真にその花を知り得たということにはならないのである。このようなあり方を、私は「無我的あり方」と呼ぶものである。無我的あり方とは、無為無作のことばではない。それ故、「無我の我的なあり方」といった方がよいのかも知れない。それは、見る私と見られる花とが、主体客体の対立的関係においてあると共に、見る私が見られる花の中に入り込み、或いは見る私の中に見られる花が入って来て、主体と客体とが相即相入 (Interpenetration) の関係においてあるというあり方である。又印度の思想家、Nāgārjuna (150?-250?) のいう不一不異 (anekārtha-anānārtha) の境地でもある。

Nāgārjuna は「我」というものを、自性 (Svabhāva: self-nature) ありとする考え方 (ansich-sein) というように考えているようである。彼の主著である「根本中論 (Mūlamadhyamakaśāstra)」の第 10 章をみると、そこでは、火 (agni) と薪 (indhana) との関係が論ぜられているところであるが、有我論者は物にはすべて自性というものがあるとか、或いは、そういう自性を持っているものが、互に相依相待 (mutual dependence) の関係においてなり立っているとかと主張しているのである。例えば、吾々は、もえている状態をみて、「火がもえている」とか、或いは「薪がもえている」とかという。その場合、吾々は、火は熱いものとか、もやしたり破壊したりする性質を持っているものとかと思っているし、薪はもえる性質なものと思っている。しかも、そのように、火や薪の自性をみとめながらも、一方ではそういう自性を持っている火は薪がなければもえないし、薪は火がなければもえないから、火と薪とは相依り相待つ関係において、もえるということが成り立つのだとも思っているから、このような有我論者の主張には、別に奇異を感じないのである。ところが、このような有我論者の主張に対して、Nāgārjuna は色々反論するのであるが、要約して云えば、火に物をもやすとか熱いとかという自性があるのであるならば、薪がなくとも、火はそれ自体でもえるということが可能であるはずであるし、又薪の方でも、火がなくてももえるはずである。又、そういう自性のあるものが相依相待の関係において成り立つということも、不合理な話ではないかと、有我論者の主張の

過失をしりぞけ、

火は(薪より)他から来ない。火は薪中には存在しない¹⁾。

(āgacchaty anyato na-agnir indhane 'gnir na vidyate)

薪そのものは火ではない。薪から離れては火はない²⁾。

(indhanaṁ punar agnir na na-agnir anyatra ca-indhanat)

と、彼の立場を明らかにするのである。この中「火は(薪より)他から来ない」という句と、「薪から離れては火はない」という句とにおいては、火と薪との一体性がとかれ、「火は薪中に存在しない」という句と、「薪そのものは火ではない」という句とにおいては、火と薪との異体性がとかれている。つまり、火も薪も本来的に自己を主張する何ものもない(無自性である)のであって、そういう無自性である火と薪とが、互に相依り相待って、はじめてもえるという状態が成立すると Nāgārjuna は考えるのである。

このような Nāgārjuna の無我論は、宇井伯寿博士も云われるように、固定的実体の否定もしくは固定的実体観の否定なのであって、実体を否定すれば、すべては関係聯関のものと見られる外に見られるようがなくなるわけである³⁾。関係聯関というのは、Nāgārjuna の場合は、不一不異ということであって、それは又、縁起 (pratītyasamutpāda; the interdependent causation) でもあり、或いは、

縁起なるもの われは空ととく⁴⁾

(yaḥ pratītyasamutpādaḥ śūnyatāṁ tām pracakṣmahe)

と Nāgārjuna によっていわれているから、空 (śūnyatā; emptiness) でもあるのである。ところで、不一不異ということも、縁起ということも、或いは空ということも、皆、吾々の「我」の否定であり、吾々の執着 (abhiniveśa; attachment) をしりぞけた無我の世界、無執着の世界をあらわす言葉であるが、今、これを図式で書きあらわしてみると、

火=薪であると共に、火×薪

善=悪であると共に、善×悪

主観=客観であると共に、主×観客観

1=2 であると共に、1×2

1<10<100 であると共に、1>10>100

私=神であると共に、私×神

等々の心境であるということになる。ところが、このようにいうと、例えば、善は悪であると共に又善は悪ではないなどというような倫理を逸脱した話は、全く馬鹿げているとか、或いは 1=2 であると共に 1×2 などというようなことは、全く非合理であるとかという批難が起るこ

と思うが、そのような批難は吾々の知性による分別にもとづくから起るのであって、もともと吾々人間の知性にもとづいた合理主義というものは、一面的であって、すこぶるあやしいものであることは、自性のあるものが互に相依相待の関係においてなり立っていると考えて、少しも矛盾していると思わない有我論者に対する Nāgārjuna の反論からもわかる通りである。このように無我的あり方においては、すべてを空にもとづいて、不一不異なりとみてゆくのであるから、このような見方を、仏教では古来、智慧 (prajñā; 般若智; wisdom) と名づけている。

智慧は無我の境地において働くものである。否、知性が働き出す以前に働くものであるといった方が適切かも知れない。例えば、吾々は、夫婦というものは、夫と妻とは一体であると共に、夫は夫としての持ち前、妻は妻としての持ち前をそれぞれ守ってゆく時に、はじめて良い家庭がきづき上げられるということを知っている。つまり、夫婦の間が夫=妻であると共に、夫キ妻という不一不異の関係がなり立っている時に、その家庭は円満であるということをして別に知性の上にのぼらせて不一不異といわなくても、無意識の中に、知っているのである。これは、吾々の一人一人が持っている智慧 prajñā の働きによるのである。ところが、このようなもともと不一不異においてなり立っている (と言葉によって分別的に説明される本来的な) 夫婦のあり方の上に、自性ありと分別する知性が働き出すと、夫は夫で自己を主張し、妻は妻で自分を主張するということになって、夫=妻という面がなくなるから、対立が生じ、家庭内は不和となる。労資の関係においても、同じことがいえるのである。吾々の知的分別からすれば、現実に労資という階級的違いがあるから、労働者或いは資本家に、それぞれ自己の立場を主張すべきもの (我 ego) があるように思われるが、しかし、そういう階級的相違を認めて、労働者キ資本家であるとすると共に、労働者=資本家とする不一不異的な、無我的あり方でなければ、健全な経営とか労資関係というものは成り立たない。又、宗教の世界においても私=神であると共に、私キ神という自覚がなければ、真に救われたとはいいい得ないのである。

このように、吾々は、不一とみる知性ではなくて、不一不異とみる智慧によらなければならないのであって、このような智慧を得る時こそ、真に人間としての主体性が確立されるのである。

4

かくして、ここに二つのタイプの間像がえがかれたことになる。一つは、分別的知性をそなえた人間像であり、もう一つは無分別の分別とでもいうべき智慧 prajñā を体得した人間像である。前者は、知性が万物の尺度であるから、私以外の何ものも信じないという、いわば「私は私を信ずる」というタイプの人である。後者は智慧によって行動し、智慧を指導原理としている人であるから、無我的我の人であり、「随处に主と作る」¹⁾ というタイプである。ところが、「私は私を信ずる」という人も、「随处に主と作る」というゆき方の人も、共に人間とし

での主体性を前面に打ち出し、共に人間として、積極的に生きて行こうとする意欲があらわれてはいるものの、仔細に見当してみると、「私は私を信ずる」という生き方には、私なる存在の中に、私という対立物をかかえているから、それ故に、私なる我に執着 (abhiniveśa; attachment) している姿であるということがいえる。これに対して、「随処に主と作る」という生き方においては、「主」とは自我という我を否定した無我の我であるから、「大死一番絶後に蘇えり」という時の、絶後に蘇えった私であり、又、十字架にかけられて復活した私でもある。それ故「随処に主と作る」という生き方は、孔子の

心の欲するところに従って^{のりこ}矩を踰えず

という境地であり、又、親鸞が弟子の唯円に語ったという

念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたわず。諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと。云々²⁾

という絶対主体性の上に立った力強い独立者としての自覚でもあるというふうにいえよう。

又、「私は私を信ずる」という生き方においては、自我が中心であるから、分別的に働らく知性だけが絶対であり、そのため感情が次第に排せられていくから、com-*passion* というものがなくなり、必然的に自己疎外の状態に陥ることとなる。一方、「随処に主と作る」という生き方においては、随処に「主」と作さしめるものは智慧 (prajñā) であるので、智慧すなわち般若智が指導原理となつて働らくから、

Two Opposites, disposed in a similar Situation against each other, are contained in Connection³⁾.

(2つの対立が互に対立したままで、手を握っている)

という慈悲 (karuṇā; compassion) の世界、すべてが生かされているという世界が開られ、それ故に

God Appears & God is Light
To those poor Souls who dwell in Night,
But does a Human Form Display
To those who Dwell in Realms of day⁴⁾.

(神は夜の世界に住むあわれな人々のためにあらわれる。

そういう人々にとって神は光である。

しかし昼の世界に住む者のためには
人間の姿があらわれる。)

ということがはつきりといいきることが出来るのである。

このように吾々をして真に独立者たらしめる智慧は、知性が分別智 (vikalpa-jñāna) といわれるのに対して、無分別智 (nir-vikalpa-jñāna) ともいわれているのであるが、いかに知性が働く以前に働くものであるから分別出来ないものだといったとて、分別智である知性によって表現されなければ、普遍性 (universality) ということがいわれなくなるので、知性の上にのせて一応、不一不異とか、絶対矛盾的自己同一とか、或いは、般若経 (Prājñāparamita-sūtra) のいたるところに出てくるところの即非の論理、即ち、「A は A ならず、故に A なり」といういい方で表現されるのである。このような智慧にもとづいての、随処に主となるという生き方こそ、実に、

We live as One Man ; for contracting our infinite senses
We behold multitude, or expanding, we behold as one,
As One Man all the Universal Family, and that One Man
We call Jesus the Christ, and he in us, and we in him
Live in perfect harmony in Eden, the land of life, ……⁵⁾

(吾々は全一なる人として生きている。吾々は無限の感覚を縛る時、そこには分離があるが、それを放つ時、吾々は宇宙の一家族としての全一なる人を見るのだ。その全一なる人こそ、吾々はイエス・クリストと呼んでいる。彼は吾々にあり、又吾々は彼にあり、生命の地エデンに、完全な調和をえて生活している。……)

ということになるのであって、この時こそ、吾々は自己疎外というようなあり方から解放され、独立者としての自覚にたてるのである。

5

Nietzsche は「神は死せり」といった。神を殺したのは、外ならぬ吾々の知性なのである。ここにおいて、今までの最高の価値は、その価値を全く喪失してしまったわけである。神を殺したということについて、物狂いの人は、次のようにいつている。

これよりも、偉大な所業はいまだかつてなかった——そしておれたちのあとに生れてくるかぎりの者たちは、この所業のおかげで、これまであったどんな歴史よりも一段と高い歴史に踏み込むのだ!¹⁾

Nietzsche においては、自己自身の人間存在を力への意志として意志することが、これまであったどんな歴史よりも、一段と高い歴史に踏み込むことになるのであった。したがって、神という従来の最高の価値の喪失と共に、「力への意志 (Wille zur Macht)」ということが、新らし

い価値として定立されるのである。この場合、力への意志として意志するのは、私なる我 (ego) であるから、Nietzsche の Nihilism においても、やはり人間の我というものは、否定されていないと云うべきであろう。

私からいわせれば、神を殺してしまったのは、外ならぬ吾々の知性 (即ち分別智) であるのに、その知性を神に代る新らしい価値であるとして定立することが、より高度であるというふうに考えられてはならないのであって、——現実はどうやら、そのように考えられているようであるが——むしろ、神が吾々の知性によって殺されてしまった以上、知性ではなくて、無分別の分別なる智慧 (prajñā) を指導原理として定立し、それによって、吾々各自が、無我 (の我) に徹してゆくべきである。そうして、この智慧によって、吾々が随処に主と作る時、はじめて機械文明の中にありながら、従来のすべての歴史よりも高い歴史の一員となることが可能となるのである。かくして、不安 (anxiety) とか、ノイローゼとか、或いは、自己疎外といった言葉であらわされる現代人の精神的危機は克服され、人間は「無我 (の我)」としての主体性を保ちながら、独立者としての自覚のもとに、力強く生きてゆくことが出来るようになるので、これまでよりも一段と高い人間の歴史が、必然的に展開してゆくこととなることは、明白であると思うのである。

(昭和 40 年 4 月 27 日受理)

<注>

1

1) Nietzsche: Die Fröhliche Wissenschaft, Alfred Kröner Verlag, p. 140.

2) ニーチェ全集, 第八巻, p. 188, 理想社.

3) Erich Fromm は次のようにのべている。

Western man is in a state of schizoid inability to experience affect, hence he is anxious, depressed, and desperate. He still pays lip service to the aims of happiness, individualism, initiative—but actually he has no aim. Ask him what he is living for, what is the aim of all his strivings—and he will be embarrassed. Some may say they live for the family, others, “to have fun”, still others, to make money, but in reality nobody knows what he is living for; he has no goal, …… (Zen Buddhism and Psychoanalysis, p. 79 George Allen and Unwin)

このように、生きる目標をもたずに生きている人達は、何も西洋人に限られるわけではなく、日本人についてもいえることである。

4) キエルケゴール, マルクス, ニーチェ, その他, 現代の実存主義者達。

5) Zen Buddhism and Psychoanalysis, p. 79.

6) Man has followed rationalism to the point where rationalism has transformed itself into utter irrationality (ibid. p. 79).

2

1) 三木 清・訳: 省察, p. 39, 岩波文庫.

2) ibid. p. 43.

3) Keynes: The Complete Writings of William Blake, p. 273 (Vala or the Four Zoas), The Nonesuch Press.

3

- 1) 中論第十章, 觀燃可燃品 (agni-indhana-parikṣā nāma daśamaṁ prakaraṇam), 第13偈.
- 2) ibid 第14偈.
- 3) 宇井伯寿: 仏教哲学の根本問題, p. 122, 大東出版社.
- 4) 中論第二十四章, 觀四諦品 (ārya-satya-parikṣā nāma caturviṃśatitamaṁ prakaraṇam) 第18偈.

4

- 1) 臨濟錄, p. 43, p. 53, 岩波文庫.
- 2) 参考までに英訳もあげておこう。
 “One who calls Nembutsu realizes the Direct way of No-Hindrance. What does this mean? That such a man of faith, revered by the deities of heaven and earth, cannot be obstructed by devils or heretics. Not only is he undisturbed by evils karmically motivated, but through Nembutsu surpasses every other goodness. Thus he realizes the Direct Way of No-Hindrance”. TANNISHO, p. 14, Higashi-Honganji.
- 3) Keynes: The Complete Writings of William Blake, p. 131 (Annotations to Swedenborg). The Nonesuch Press.
- 4) ibid. p. 434 (Poems from the Pickering M.S.).
- 5) ibid. pp. 664-665 (Jerusalem).

5

- 1) ニーチェ全集, 第8巻, p. 189, 理想社.
 Es gab nie eine größere Tat—und wer nur immer nach uns geboren wird, gehört um dieser Tat willen in eine höhere Geschichte, als alle Geschichte bisher war! (Die Fröhliche Wissenschaft, p. 141, Alfred Kröner Verlag).